

奈良高専 図書館だより

No. 6

記事

1. 巻頭言、私の読書歴
2. 贈る言葉
3. 私と図書室
4. 本とのかかわり
5. 新着図書案内

1980年5月 奈良工業高等専門学校 発行

私の読書歴

54年度図書館委員長

笠野卓夫

「図書館だより」の巻頭言を書くことになって、さて、何を書いたものかと考えぬいたあげく、諸君と同年代だった頃の、私の読書歴を回想しながら、思い出を書きつづってみることにした。

中学校——といっても、旧制の中学校、和歌山中学校——に入学したのは、戦前の昭和10年、そこで、3年生の頃から卒業時まで教えて頂いた国語の先生のことを思い出される。若さにあふれる先生で、その情熱のすべてを生徒にぶっつけるというタイプ、多くの生徒からしたわれ、尊敬された方であった。心酔という表現もオーバーではないような心境で、よくお宅へもお邪魔して、いろいろお話を伺ったものであった。

後に、戦死なさったと聞き、あの先生が……と哀しい思いを長い間持ち続けたものでした。今でもその面影がほうふつとして思い出されます。

その先生がよく言われたことのひとつが「若いうちに、文学的な作品を読んでおけ。深くなくてもよいから、一つでも多くのもに接しておけ。将来きつと読んでおいてよかったなあと感じる時がある。」という言葉であった。

多くの生徒がこの言葉によって読書に励んだものだった。私もその一人。

その頃、私の家は経済的に余裕がなかったものだから、学校の図書館をよく利用したものだ。学校の

図書館は校門のすぐそばにあり、入口には松の木の下に、先輩 野村吉三郎海軍大将の筆になる「天は自ら助くる者を助く」、(“Heaven helps those who help themselves” の訳) の石碑が建立されていたのが、今もなつかしく目にうかぶ。その図書館で借りた本をよく読んだものだった。時には夜ふかしをして親にしかられたりもした。先生のすすめられた本はほとんど読んだ。その範囲は、万葉集、源氏物語、徒然草、からはじまって、明治に入って 徳富蘆花、夏目漱石、まで広いものだった。——もともと、古典ものは、中学生にも読めるように編集されたものだったように思う——今 思い出してみても、あの頃はよく読んだなあ—と感慨ひとしおなものがある。

中学校を出て、高等師範へ入ったのが戦争の始まった年、大学を出たのが戦争の終わった翌年と、東京での学生生活は全く戦争で始まり戦争とともに終わったようなものだった。戦争中の物資・食料の不足、工場への動員 東京大空襲等、軍隊へは行かなかったが、戦争の一面はすべて体験してきたわけだが、この間の読書は、はじめのうちはともかく、中程以後は専門書以外は全くないに等しかったとしか思い出せない。

中学時代、理数系へ進むと心にきめていた者が、なんであんなに夢中になって文学書を読んだのだろうかかと、いまふり返ってみると不思議な気がする。先生の感化で……としかいいようがない。しかし、やはり 何

か得る所があったと確信する。もしこの中学時代の読書がなかったとしたら、おそらくは頭の中は理数系にかたよった、かたわな素養しか持たない人間になってしまっていただろう。それがともかく一応の幅広い知識を持って——正確さ、深さは少ないにしても——世間を渡っていけるのは、前の先生のおかげであると深く感謝している。

諸君も理数系の学生である。その点は私の若い時とよく似ているといつてよいだろう。ここで、私も、私の先生の言葉をそのまま諸君に贈りたいと思う。

最近の学生の読書時間は平均して非常に少ないと聞く。テレビにお守りされて育った世代。活字離れを失ってしまっ、映像と音声から、物語りのすべてをつかもうとする。漫画や劇画を好む若者が多いのもその一つの流れであろう。大人にしても、テレビドラマに夢中になる人が多いのが世間一般の風潮であろう。

しかしこれでは、じっくり考えるということがなくなるだろう。思考力、想像力、表現力の低下はまぬがれないだろうし、人格の形成といった面からみても、欠陥のあるものになってしまうだろう。

さいわい諸君達は、5年の一貫教育ということで、途中での大学受験戦争にまきこまれることもなく、余暇を、読書時間を見出すには好条件に恵まれている。余った時間を無為に過すことなく、読書に使うことをまた、その一部は、文学書にさくことを、声を大にしてすすめた。

本校では国語科で、毎年読書感想文の募集などで、諸君に読書の習慣をつけるようされているのは、大いに結構なことだと思っている。この企画は今後も続けられるだろうし、ますます発展することを望んでいる。また、図書館にも、文学書はたくさんあるのだから、棚に並べてほこりをためるだけにならぬよう、大いに利用して、教養を深め、円満な人格の形成に役立たせてほしいものである。(数学科教授)

贈る言葉

昭和54年度機械工学科卒業生

5 M A 富岡光博

「もういくつ寝ると…」と数えられるほど間近に卒業が迫っている、きょうこのごろの私ではある。

「卒業」とは、早いものでもう五年間もの長くて短い間、本校にお世話になってきた。なかでも、図書館は、格別である。しばしば、翌日に提出を控えたレポートの文献を探して、さらに時には(もうすぐ無罪放免の大赦を得るから話すが、)その執筆に徹夜しそこない、当日の別の授業をサボって(すみません)人眼を憚りながらもまた血眼となって、その仕上げを期して潜んだこともあれば、友人と一緒に夏休みの一大旅行

のプランを練るべく、胸をわくわくさせて訪れたこともあり、あるときは、微かな恋の思いが胸をかすめてなにということなく、書林の中をふらふらとさまよっていて、いつしか美しい本を手にしていたこともあった。また どうしても必要と思って、大阪中之島の図書館まで出かけても見つからなかった雑誌のバックナンバーを、ふと本校の館員の方に話しをすると、即座に、うっかり見落としていた書棚から、思いもかけず探し出して下さり、抑天して拝読したことや、やはり館員の方の奨めで井上靖氏の自伝的小説を読み、その今まで僕が気づかなかった、生きざまの或る部分に心を動かされたこともあった。

五年前、私が入学したころは、図書室は本館一階の南西部(現在、会計課がある。)におかれ、現在と比して、蔵書の数も種類も少なく、とりわけ、新刊書や初学者が取りつきやすいように書かれた専門書があまり置かれていなかったように記憶している。しかし静粛で、大学の図書館らしい雰囲気を常に持っていた。

現在では、図書館は拡張した設備とともに、四万余冊もの豊富な書物と、更に最近では、レコード・テープなどの録音物をも備え、非常に高いサービスが気軽に受けられるようになっており、しかも日を追って充実の度を濃くしている。従って、利用者が増え、昼休みには多くの学生がひきもきらず訪れてカウンターに列をつくることさえあり、このことは非常にすばらしい事だと思ふ。なぜなら、図書館はできるだけ多くの人に、多くの種類の、多くの量の、良質な情報を与えることを望んでいて、利用が増えるということは、その価値が高まることに他ならないから。しかし、この反面、雑談が増えてよいものであろうか。かく言う私も、加害者として身に覚えがあり、顔から火の出る思いがするが、学生の自浄本能に訴えたい。「図書室での雑談は絶体に慎むべきである」と。複数人数で雑談する体制に入りそうになったなら、談話室などへ座を移すべきである。もう一件、言うも聞くも気持ちの悪いことだが、図書の散逸、すなわち無断で図書が持ちだされ、そのまま返ってこないということが起きていることだ。一冊まるまる粉失しなくとも、ぶ厚い工学の便覧がわずか数ページ、むしり取られていても、もうそれは、完全な資料としての価値を失ってしまう。なんとしたことか。すべて、図書館の恩恵に預る人は、このような事件が聞かれなくなるのを願ってやまないだろう。禁帯出の本でも、一晚なら貸してもらえりし、借り手が多い本なら予約もできる。さらに、本が急に必要となったが借出券を携行していないという場合は、館員の方にお問い合わせすればよい。さらに、どうしても本の一部がそのまま欲しいというようなときには、現在はコピーという有効な手段があり、学生会で受けつけてくれる他、図書室内でも、もうすぐサービスが受けられるようになることである。

図書館を、いろいろなジャンルの書物を探す、あるいは書林の中をぶらりと散策するすべての人が、いつでも、気持ちよく、親しみをもって利用できる雰囲気を保ち続けるために、学生各人が、自分自身の図書館であると共に、さらにそれ以前に高専全体の図書館であることを認識しつつ、どしどし図書館を利用されることを願ってやまない

私 と 図 書 室

昭和54年度電気工学科卒業生

岩 田 孝 清

五年間の高専生活で、私はそれほど図書室を熱心には利用しなかった方であると思う。自分で本当に読みたいと思った本は、主に自分で買ったし、図書室で借りた本はなぜかあまり読まなかった。私の高専生活において図書室の占める領域は小さなもののように思えるが本当にそうだったのであろうか。

私の図書室の利用方法は主に、専門書を借りるため勉強及びレポート書きの場として、そして単なる暇つぶし等で、専門書はよく試験前に借りに行った。これはもちろん試験勉強をするために借りるのであるが、初めは本当に、貸りた本で勉強をしたのであるが、そのうちに借りるだけで安心するようになり、結局勉強はしなかったというような事が多くなってきた。その頃、試験の前日によく友と話したものである。「お前そんな本借りても家で勉強なんかしないくせに」「いや、借りただけで今日一日安心出来る」などと。この気持ちは高専生であればわかってもらえる事と思う。

試験期間以外は、よく暇つぶしに図書室へ行ったものである。暇つぶしといっても全然無目的といった訳ではない。前に述べたように、私は本当に自分で読みたい本は自分で買ったが、そういう本が何かないかなと捜しに行くのは図書室であった。そしていい本を見つけると書店に行って買って来た。何も、買いに行かなくとも、その本を借りればいいと言われるかもしれない。しかし、私は借りた本であっても、いいなと思ったら、その本自体が欲しくなるたちで、図書室の本だと、いいなと思っても自分のものにならない事がわかっているため、あまり借りる気にはなれなかったのだろう。また、本を一冊借りると、何日返に返さなければならぬ、つまり何日返に読み終えなければならぬという一種の義務を与えられた形になってきて、私は与えられた義務というものあまりやりたがらない癖——悪い癖で、自分でも直さなければならぬと常々思っている——があるため、読み通す気力が減少してしまう事がよくある。結局初めからその本を読む気があまりなかったのか、それともその悪い癖があまりに病的であったのかなのだが、先に述べたように、

欲しくなる程の本気で読みたい本は借りないで自分で買うようにしていたので、図書室で借りた本は初めからあまりその気になかったのだろう。そんな訳で私は図書室で借りた本——文芸書——はあまり読めなかった。

以上のように専門書は安心するために借り、文芸書は借りてもあまり読まないとする、私にとって図書室はそれ程たいした価値も持たない存在であったのだろうか。いや、専門書を借りてもやはり勉強する時は勉強していた。フォートランの講義が皆目わからなかったので図書室で本を借りて勉強したり、ノートをとっていない科目を図書室の本で独学したり——これはあまりほめられた事ではないが——、進学の勉強などをしたりした事を思い出すと、図書室があったから今の自分があるのだという事が少し大袈裟かもしれないと言えると思う。また文芸書でも、図書室でいい作家を知った事がある。それはランボーである。私が初めてランボーを読んだのは図書室であった。当時、私は詩を読んでみようと思い、図書室でヴェルレーヌやリルケなどを読んだが、あまり感動しなかった。いや、読んでいる時は何か感じるものがあるにはあったが読んだ後の印象は薄かった。しかし、初めてランボーを読んだ時は強い印象を受けた。その詩の文学的な構成や言葉の選択などの難かしい事はわからないがとにかく強く感じた。そこで早速書店へ行き「地獄の季節」を買って来て読んだ。これは、日頃ぼんやりと暮らしていた私に、バットで一発頭を撲られたような衝撃を与えた。そんな訳でランボーを知り、その後ボードレールも知り、その他の作家も知った。このように私の場合、図書室で作家を知るきっかけを得たということが数回あった。これら五年間の私と図書室とのことについて今一度思い起こしてみると、私の高専生活において図書室の占める領域はやはり大きかったように思う。

私のこうした図書室との付き合い方は模範的なものではないが私にとっては価値ある付き合い方であった。

本 と の か か わ り

昭和54年度化学工学科卒業生

5 C 34 望 月 昇

自分の考え方に影響を与えるものには色々あるが自分の場合、本に最も影響されたと思う。その理由として考えることは、ある種の本の中には、おそらく何らかの形で著者の素直な考えが述べられているからだと思う。だから本を読むには、こちららも偏見とか、それに類する感情を捨てて、素直な気持ちで取りかかれれば良いと思う。

そんな中で今まで自分の印象に残ったのは、エミリ・ブロンテの「嵐が丘」、梶井基次郎の「檸檬」、そし

大江健三郎の「見る前に跳べ」などである。

最初の「嵐が丘」については色々と考える所があった。ここでは一人の人間が徹底して自我を貫き通すのである。他人など全く関係なく、自分の目的のためには我が子さえも利用してしまう。これは、脅威的なことである。しかし、同時にその人間は全く純粹でもあった。もちろんそれは自分の欲望に対してであり、そこには中途半端な利己主義が、入り込む隙間などは全くみられない。その人間は以上のような事をただ行動しただけで、全く口にはだしていない。迷わずに行動したのである。これも私にとって新発見であり、結論として、人間にとっては、たとえどんな考え方であれ、迷わずそれに従えば、それは他人を寄せつけない強固なものとなるだろうということである。

ある意味において、以上のようなことと全く反対であるのが、残り2つの小説である。

「見る前に跳べ」というのは、つまり「見たければ見ればいい、しかしお前は跳ばなければならぬ」という言葉を縮めたものである。主人公は泥沼の中につきり切ったような生活からなんとか脱出しようと懸命に努力するのであるが、結局、それは果たせずに終

わった。そして、今まで自分は一度も跳ばず、これからも決して跳ぶことができないだろう、という事に気がつくのである。本の解説をそのまま拝借すると、これは「屈伏感と自己欺瞞の意識にさいなまれた同時代の青年の内面を文学に定着させた作品」とあるが、正にその通りであろう。

同じ主題を取り扱っているが、見方が全く「見る前に跳べ」と異なるのが「檸檬」だろう。これは、屈伏感を「得体の知れない不吉な塊」という物に置き換えて、それをレモンで追っ払ってしまう。これは何ら解決が無いのであるが、何か透明感のある、魅力的な文章で同じように屈伏感、あるいは焦燥感など、青年の内面を文学に定着させていると思われる。

以上のような事が、私が本とかかわりを持ったことにより、印象を持った本である。

本には色々と参考になることが多い。人間の考え方は、昔から変化していないそうであるから、おそらく本を読めば自分が悩んでいるようなことに、参考となることもあるだろう。そしてその上で自分とのかかわりから自分なりの答を見つけたせば、いいのではないだろうか。



新 着 図 書 案 内



< 総 記 >

ちくま少年図書館	筑摩
42: 日本史との出会い	
43: 原子の発見	
奈良県年鑑 1980	奈良新聞社
世界の博物館	講談社
19: シルクロード博物館	
20: インド国立博物館	
新世紀百科辞典	渡部ひろし 学研
出版界	朝日新聞社 みき書房

< 哲学・宗教 >

フィナーレの発想	外山滋比古	講談社
花鳥風月のこころ	西田 正好	新潮社
NTD新約聖書註解 8		同刊行会
世界の聖域 9: セイロンの伝		講談社

< 歴史・地理 >

あの時 世界は……	磯村 尚徳	日本放送出版協会
ペルセポリスから飛鳥へ	松本 清張	"
ルネッサンス夜話	高階 秀爾	平凡社
ここに古代王朝ありき	古田 武彦	朝日新聞社
青銅の神の足跡	谷川 健一	集英社

図説日本文化の歴史 4: 平安	小学館
教科書に書かれた朝鮮	金 達寿他 講談社
夜明け前の中国	陣 舜臣 朝日新聞社
日本人名大事典 1~6、別巻	平凡社
朝日旅の百科奈良 大和路北部・南部	朝日新聞社
もうひとつのヨーロッパ	佐久間 穆 "
シルクロード 旅をする本	"
旅のロマネスク	松永 伍一 "

< 社会 科学 >

アメリカのビジネス感覚	鳥越 浩	経済界
大学で何を学ぶか	加藤 諦三	光文社
原理運動の実態	茶本 繁正	三一
岩波講座子どもの発達と教育		岩波
1: 子どもの発達と現代社会		
2: 子ども観と発達思想の展開		
4: 幼年期発達段階と教育1		
受験と非行の時代に	永畑 道子	国土社
会社人間のカルテ	朝日新聞社	朝日新聞社
経済学辞典	大阪市立大学	岩波
経済学全集第2版 13: 分配理論		筑摩
子供たちの復讐 上・下	本多 勝一	朝日新聞社
ライフ パワーを身につける	川勝 久	講談社

町工場 森 清 朝日新聞社
 日本社会運動人名辞典 塩田庄兵衛 青木
 大月経済学辞典 同編集委員会 大月
 世界の民族 平凡社
 3：ヨーロッパ
 6：アマゾン・パンパス
 戦中教育の裏窓 山中 恒 朝日新聞社
 先生少しは反省せよ 安藤 操 三一
 知る権利 奥平 康弘 岩波
 ユダヤ人の頭日本人の頭 J. ハルペン 青春出版社

< 芸 術 >

ベートーヴェン第九 小松雄一郎 築地書館
 楽器の科学 橋本 尚 (ブルーバックス)
 原色現代日本の美術7：近代洋画の展開 小学館
 人は役者、世界は舞台 山崎 正和 集英社
 日本美術全集 学研
 18：近世武将の美術
 21：琳派
 音楽の旅・絵の旅 吉田 秀和 中公
 レコードのモーツァルト “ ”
 さあ絵を描こう 野見山暁治 河出
 西洋美術全集 グラフィック社
 5：初期中世美術
 9：バロック・ロココ美術
 11：20世期の美術
 週刊朝日百科世界の美術 7・8 朝日新聞社

< 体 育 >

自分の山歩き入門 川口 邦雄 青春出版
 上高地 楠目 高明 草思社
 海よ、私はくじけない 石浜 紅子 光文社

< 語 学 >

学研漢和大事典 藤堂 明保 学研
 ラガナの記事修業 D. ラガナ 講談社
 日本のことばとところ 山下 秀雄 “
 レトリック感覚 佐藤 信夫 “
 小学館ランダムハウス英和大辞典 (全1巻) 小学館

< 日 本 文 学 >

愛を旅する人へ はらたいら 講談社
 愛してよろしいですか 田辺 聖子 集英社
 アルファベット 野坂 昭如 “
 暗号名は虎 豊田 有恒 徳間
 有吉佐和子の中国レポート 有吉佐和子 新潮社
 悪しき星座 森村 誠一 光文社
 葦の言葉 小川 国夫 筑摩
 あしたのジョーは死んだのか 朝稲日出夫 “
 芭蕉物語 上・中・下 麻生 磯次 新潮社

ビートルズの優しい夜 小林 信彦 新潮社
 ビッグヘッド 田中小実昌 河出
 望郷蛮歌 風や天 伊藤 信吉 集英社
 ぼくが狼だった頃 寺山 修次 文芸春秋
 ぼくらの気持 栗本 薫 講談社
 カリフォルニア 土居 良一 “
 キャンパスの雨 三好 京三 文芸春秋
 地中海の真珠 谷 克二 角川
 沈黙の函 鮎川 哲也 光文社
 チョウたちの時間 山田 正紀 角川
 ちょっと寄り道 三木 卓 集英社
 大誘拐 天藤 真 徳間
 黙って書いてごめんなさい はかま満緒 青春出版
 ダメの人 山本 夏彦 文芸春秋
 断崖の愛人 笹沢 左保 祥伝社
 できそこない博物館 星 新一 徳間
 電車でっけ停戦 福本 武久 筑摩
 風景はなみだにゆすれ 井上ひさし 中公
 不在の部屋 曾野 綾子 文芸春秋
 玩物草紙 渋沢 龍彦 朝日新聞社
 原文対照大鏡新講 橋 純一 武蔵野書院
 現代文学史 上・下 小田切秀雄 集英社
 現代詩の解釈と鑑賞事典 小海 永二 旺文社
 源氏物語 上・中・下 村山 リウ 創元社
 午後の恋人 上・下 平岩 弓枝 文芸春秋
 劫火の世紀 岡本 好古 講談社
 グロテスク 中村 光夫 河出
 拝啓名探偵殿 藤原幸太郎 光文社
 俳句の解釈と鑑賞事典 尾形 仵 旺文社
 俳句入門 中村草田男 みすず
 花と虫の記憶 大庭みな子 中公
 花嫁人形 佐々木丸美 講談社
 ハードボイルド風に生きてみないか 生島治郎 KKベストセラーズ
 遥かなるボストン 小西 章子 鎌倉書房
 遥かな坂 夏樹 静子 毎日新聞社
 春の海鳴り 北泉 優子 講談社
 果てなき旅 上・下 日向 康 福音館
 平家物語の世界 上・下 水原 一 日本放送出版協会
 秘画殺人事件 上・下 石沢英太郎 集英社
 東の国から・心 小泉 八雲 恒文社
 非合法員 船戸 与一 講談社
 火の車 立松 和平 集英社
 方丈記殺人事件 斎藤 栄 光文社
 北壁に舞う 長谷川恒男 集英社
 炎の大地 西村 寿行 徳間
 滅びざるもの 眉村 卓 “
 百花遊歴 塚本 邦雄 文芸春秋
 百万 中里 恒子 “
 一枚のレコード 吉田 秀和 中公
 怒るべからず一癖齋 杉森 久英 河出

犬が星見た ロシア旅行	武田百合子	中公	大いなる助走	筒井 康隆	文芸春秋
愛しい女	三浦 哲郎	新潮社	鬼の太鼓	高橋 昌男	集英社
ジャックの正体	井上ひさし	中公	女が職場を去る日	沖藤 典子	新潮社
事件百景	佐木 隆三	徳間	女患者	清水 一行	光文社
12人の浮かれる男	筒井 康隆	新潮社	オーパノ	開高 健	集英社
銃と十字架	遠藤 周作	中公	男が女をみつめる時	五木 寛之	主婦と生活社
怪談・骨董	小泉 八雲	恒文社	男たちのバラード	落合 信彦	集英社
回帰点	小林 景子	河出	男友だち女友だち	吉行淳之介	新潮社
回想の芥川・直木賞	永井 龍男	文芸春秋	パロディ志願	井上ひさし	中公
感想	小林 秀雄	新潮社	ポロポロ	田中小実昌	〃
唐獅子超人伝説	小林 信彦	文芸春秋	ポトマックの兩岸	筑紫 哲也	朝日イブニングニュース社
風花のひと	五木 寛之	講談社	雷鳴の開える午後	辻 邦生	中公
紀行ふるさとの詩	伊藤 信吉	〃	ラインの古城	新田 次郎	文芸春秋
近代文学論争 上	臼井 吉見	筑摩	流星 上・下	永井 路子	〃
近代作家と西欧	太田 三郎	清水弘文堂	魚は水に 女は家に	田辺 聖子	新潮社
気さくに語ろう	榊 利夫	光和堂	さまざまな自画像	井上ひさし	中公
北の別れ	南部樹未子	光文社	サングラスの少女	北山 修	〃
孤独のとなり	三浦 綾子	角川	さらば国境よ	木村 春作	集英社
幸福の絵	佐藤 愛子	新潮社	さそりたち	井上ひさし	文芸春秋
この百年の小説	中村真一郎	〃	青年の領域	山田 智彦	〃
古都旅情	瀬戸内晴美	平凡社	青春の仮免許	大谷羊太郎	祥伝社
砕かれる	生島 治郎	集英社	青春失恋記	太田 治子	新潮社
雲の肖像	大岡 昇平	新潮社	宣告 上・下	加賀 乙彦	〃
くれない	渡辺 淳一	集英社	社長室直属遊撃課	かんべむさし	講談社
黒い海への訪問者	丸山 健二	新潮社	志賀直哉論	中村 光夫	筑摩
黒いヴァイキング	谷 恒生	集英社	子午線の祀り	木下 順二	河出
空想工房	安野 光雅	平凡社	四季・奈津子 上・下	五木 寛之	集英社
杳掛筆記	中野 重治	河出	四季の歌 恋の歌	大岡 信	筑摩
九頭の龍	伴野 朗	講談社	新源氏物語 二	田辺 聖子	新潮社
街角の煙草屋までの旅	吉行淳之介	〃	忍びの旗 前・後	池波正太郎	〃
まっくらけのけ	北 杜夫	新潮社	詩の中の母と父と子と	西郷 竹彦	みずうみ書房
明治・大正・昭和の詩人たち	大岡 信	〃	白い夏の墓標	帚木 蓬生	新潮社
未知海域	宗田 理	河出	死定席	森村 誠一	角川
満ち足りた飢え	三好 京三	主婦と生活社	シヨージ君の東奔西走	東海林さだお	文芸春秋
南十字戦線	田中 光二	講談社	食卓のない家 下	円地 文子	新潮社
水の魔法陣 上・下	斎藤 栄	集英社	書物漫遊記	種村 季弘	筑摩
むかし戦争があった	鈴木 均	プレジデント社	商戦	咲村 観	〃
妙高の秋	島村 利正	中公	昭和万葉集 4・8		講談社
内的独白	福永 武彦	河出	水中花	五木 寛之	新潮社
成田空港殺人事件	福本 和也	光文社	推理小説代表作選集 日本推理作家協会		講談社
日本児童文学概論	日本児童文学会	東京書籍	テーブル・センターの出来るまで 有明夏夫		文芸春秋
日本人の手紙	池田弥三郎	白馬出版	太陽の子	灰谷健次郎	理論社
日本の伝説		角川	タコを揚げる	小田 実	筑摩
36:伊予の伝説			单身赴任	山口 瞳	講談社
37:茨城の伝説			たおやかな鬼たち	辺見じゅん	角川
日本のおんな	平岩 弓枝	新潮社	他者への旅	籾 田鶴子	筑摩
日本を理解するまで	D. キーン	〃	てんぐさお峰	水上 勉	中公
人間の詩学	木原 孝一	飯塚	天才画の女	松本 清張	新潮社
にっぽんコミュニケーション	アサヒクラブ	朝日新聞社	鉄の時代	日野 啓三	文芸春秋
野いばらの旅	三木 卓	講談社	遠い旋律	結城 昌治	中公

とりっくものがたり	松田 道弘	筑摩	シェイクスピア四大悲劇の鑑賞	本多顕彰	法政大学
鳥たちの闇のみち	黒田宏次郎	河出	背く女 上・下	M. フレンチ	プレジデント社
濤(とう) 上・下	綱淵 謙錠	"	総説アメリカ文学史	大橋健三郎	研究社
燕のいる風景	柴田 翔	筑摩	トーマス・マン全集 6	T. マン	新潮社
つれづれ草文学の世界	西尾 実	法政大学	海への一步	M. ガロ	早川
兎のさかだち	富岡多恵子	中公	ツヴァイク全集 5	S. ツヴァイク	みすず
わが世代昭和六年生まれ		河出			
わが世代昭和二十二年生まれ		"			
わが青春 わが文学1・2	阿川 弘之	集英社	エントロピーとは何か	堀 淳一 (ブルーバックス)	
和歌の解釈と鑑賞事典	井上 宗雄	旺文社	技術の歴史 10	C. シンガー	筑摩
ワシントン通信	白井 健策	朝日新聞社	科学技術とは何か	佐藤 進	三一
私の文章修業	週刊 朝日	"	マイコン・ソフトウェア入門	古賀 義亮 (ブルーバックス)	
私の夢日記	横尾 忠則	角川	流れの科学	木村 竜治	東海大学
野望の報酬	広瀬 仁紀	文芸春秋	手作りエネルギー	C. H. ストナー (ブルーバックス)	
夜間飛行殺人事件	西村京太郎	光文社			
夜明けの河	渡辺喜恵子	新潮社			
夕空晴れて	郷 静子	文芸春秋			
図説日本の古典 6:蜻蛉日記・枕草子		集英社			

< 工学 共通 >

エントロピーとは何か	堀 淳一 (ブルーバックス)
技術の歴史 10	C. シンガー 筑摩
科学技術とは何か	佐藤 進 三一
マイコン・ソフトウェア入門	古賀 義亮 (ブルーバックス)
流れの科学	木村 竜治 東海大学
手作りエネルギー	C. H. ストナー (ブルーバックス)

< 金属工学 >

溶接全書	産報
3:溶接変形 残留応力	
19:溶接の生産性	

< 電気工学 >

電子・イオンビーム ハンドブック	日刊工業
電子工作入門	西田 和明 (ブルーバックス)
電子通信ハンドブック	電子通信学会 オーム社
レーザ	山中千代衛 東海大学

< 化学・化学工業 >

岩波講座現代化学	岩波
9:酸塩基と酸化還元	大木 道則他
12:光と分子	長倉 三郎
化学語辞典	尾藤 忠旦 三共
化学装置コストハンドブック	斎藤 義巳 工業調査会

< その他の工学・産業 >

銀葉アカシアの村	野沢 昌郎	たいまつ社
日本の森林植生	山中 二男	築地書館
流通機構	朝日新聞社	同社

< 自然科学 >

博物館だより	糸魚川淳二	共立
岩波科学の本		岩波
23:第二の誕生		
24:アンデスに宇宙線を追う		
25:日本の科学の夜明け		
近代科学再考	広重 徹	朝日新聞社
これからの発想法	渡辺 茂	"
ナウマン象の夢	井尻 正二	共立
比較統計学のすすめ	鈴木義一郎 (ブルーバックス)	
岩波講座基礎数学 23		岩波
次元とは何か	田尾 鶴三 (ブルーバックス)	

< 外国文学 >

愛の機械	I. マードック	集英社
アメリカン・ゴシック	R. プロッホ	早川
熱い国からの侵入者	ソールズベリー	集英社
ベル・リア	バーンフォード	評論社
ブロンテ姉妹とその世界	ベントレー	バルコ
文学要語辞典	福原麟太郎他	研究社
中国古典文学への招待	竹内 照夫他	平凡社
ドイツ文学史	佐藤 晃一	明治書院
英米児童文学史	瀬田 貞二他	研究社
英文学をどう読むか	L. D. ラーナー	英宝社
英詩の世界	石井正之助	大修館
フランス文学史	鈴木 力衛	明治書院
冬が来れば	E. ハンター	早川
外宇宙からの帰還	R. E. フォーラー	集英社
原作スーパーマン	E. S. マッギン	講談社
ゴーゴリ全集 5・6:死せる魂		河出
北欧文学の世界	山室 静	東海大学
イギリス文学史	斎藤 勇	研究社
インドのうた	森本 達雄	法政大学
煙の立つところ	E. マクベイン	早川
毛虫の舞踏会	M. ブデル他	講談社
きみに愛が見えるか	T. サリバン	サイマル
殺したくないのに	B. ウッド	集英社
見果てぬ夢	李 恢成	講談社
年表英米文学史	笠原 勝朗	荒竹出版
人間のしるし	C. モルガン	岩波
落照	金 達寿	筑摩
ロシヤ・ソヴィエト文学史	昇 曙夢	恒文社
世界動物文学全集 9・10		講談社
世界児童文学概論	日本児童文学会	東京書籍

パズル思考法	有沢 誠	(ブルーボックス)
三次元数学パズル	高木 茂男	〃
数学がらいをなくす本	田村 三郎	〃
統計で勝つ	ランニョン	〃
物理学小辞典	シューリス	共立
物理学はどこまで進んだか	中村誠太郎	(ブルーボックス)
宇宙線の謎	長谷川博一	〃
火星のすべて	バージュス	〃
超高層空間の謎	沢田 龍吉	〃
岩波講座地球科学 11: 変動する地球II	岩波	
蝕まれる地球	石 弘之	朝日新聞社
日曜日の地球科学	生越 忠	(ブルーボックス)
日本列島の科学	力武 常次	東海大学
日本列島の成立	藤田 至則	築地書館
尾瀬の湿原をさぐる	堀 正一	〃
砂漠化する地球	清水 正元	講談社
ひとの先祖と子どものおいたち	井尻正二	築地書館
生物行動の謎	青木 清	(ブルーボックス)
生命の科学を考える	渡辺 格	共立
ベトナム戦争と生態破壊	S I P R I	岩波
実践的植物検索小図鑑 1	石戸 忠	
実践的植物検索小図鑑 2	〃	〃
実践的植物検索小図鑑 3	〃	〃
巨木カウリーの森	堀 正一	築地書館
動物の集まる家	J. Hughes	草思社
ギフチョウの自然史	原 聖樹	築地書館
昆虫放談	小山田 龍	〃
昆虫を見つめて50年 1~3	岩田久二雄	朝日新聞社
ロンドン動物園 150年	ヴェヴァーズ	築地書館
マウンテンゴリラの森で	バウムガルテル	草思社
謎の巨鳥モア	堀 正一	築地書館
わたり鳥	吉井 正	東海大学
野生ニホンザルの世界	和田 一雄	(ブルーボックス)
カレン・アンの永い眠り	カレン・フィリス	講談社
心のメカニズム	ブラック・モア	〃
脳をあやつる分子言語	大木 幸介	(ブルーボックス)
スモン・スキャンダル	ハンソン	朝日新聞社

<文庫・新書>

今昔物語集	佐藤 謙二	角川
蘇える金狼 上・下	大藪 春彦	〃
思春期の生きかた	石田 和男	岩波ジュニア
ベートーヴェンの生涯	山根 銀二	〃
わたしの少女時代	池田理代子	〃
映画づくりの実際	新藤 兼人	〃
東京が燃えた日	早乙女勝元	〃
1945年8月6日	伊東 壮	〃
鎌倉史跡見学	沢 寿郎	〃
詩のころを読む	茨木のり子	〃
岩波新書 黄版93—101		岩波

<カセット・レコード>

秋吉敏子/フィネス	東芝EMI
アン・マレー/愛のフィーリング	〃
アート・ブレイキー&ジャズ・メッセンジャーズ	〃
ビリー・ジョエル/ニューヨーク52番街	CBS/SONY
ボブ・ディラン/武道館	〃
ボズ・スキヤッグス/ロウダウン他	〃
コニー・フランシス/ボーイ・ハント	KING
ディーブ・パープル/メイドイン・ヨーロッパ	パイオニア
アース・ウインド&ファイア/スーパーゴールド	CBS/SONY
エルビス・コストロ/アームド・フォーセス	パイオニア
エリック・カルメン/チェンジ・オブ・ハート	フォノグラム
フランク・パウセル/パウセルとアノの出会い	東芝EMI
ジョージ・ベンソン/スペース	KING
オーマンディ&フィラデルフィア	RVC
イルカ/スペシャル	PONY
石黒ケイ/女は女	ビクター
五輪真弓/残り火	CBS/SONY
岩崎宏美/パンドラの小箱	ビクター
J. ガイルズ・バンド/サンクチュアリ	東芝EMI
風/ムーティ・ナイト	PONY
越美晴/おもちゃ箱1	RVC
リンダ・ロンシュタット/ミス・アメリカ	パイオニア
松山千春/歩き続ける時	PONY
南沙織/さよならシンシア	CBS/SONY
モーツァルト名曲全集1・2	フィリップス/中公
ニールダイヤモンド/愛のたそかれ	CBS/SONY
新保牧代/二十才のエチュード	ビクター
N・S・P/青春のかけら達	PONY
オリビア・ニュートン/さよならは一度だけ	東芝EMI
大塚博堂/ラブイズゴーン	アポロン
クィーン/JAZZ:ムスターファ	パイオニア
世良公則&ツイスト/ジョイントコンサート	PONY
ジャリー・バジジ/シャリーのマジック	KING
鈴木茂/テレスコープ	クラウン
高木麻早/スペシャル	PONY
竹内まりや/ピギニング	RVC
トワ・エ・モアの世界	アポロン
渡辺真知子/フォグ・ランプ	CBS/SONY

(編集後記)

第6号を発行いたします。今号は、54年度卒業生に書いていただきました。それぞれ、5年間の高専生活での図書室とのかかわりですが、在校生のみなさんは、これから図書室とどうかかわってゆかれるのでしょうか。

私事ですが、此度高専図書館を離れることになりました。8年弱お世話になった訳ですが、まだまだやり残したことが沢山あり、後ろ髪を引かれる思いです。どうもありがとうございました。(N)